

## みんなの笑顔が増えますように

福島市立福島第一中学校 1年 杉本 陽香

「あの人変じゃない？」

わたしの友達が言った。もう一人の友達も、

「あの人、前にも会ったことがあるんだ。」

と同調するように言った。私は問いかけられたが、何も答えることができなかった。自分が思ったことを、言えなかった。

私が思ったこと。それは、きっとその人は、障害を持っているのだろうということ。見た目で分かりにくい障害を。だから、それを「変」という言葉で済ませてはいけないということ。では、なぜ自分の意見が言えなかったのだろうか。正しいと思ったことを言えなかったのはなぜか。それは、きっと自分に自信がないからなのだと思う。せっかくできた友達との関係を崩したくなかったからだろうと今更私は思う。そこが、私の弱いところで改善していかなくてはいけないところだとも思っている。

実際、私たちのような年代には障害に対して偏見をもっている人が多いと思う。でも、偏見をもたないでほしい。表には見えない本当のその人の意味を知ってほしい。少しでも周りの理解が必要だと私は考える。

私の兄も障害を持っている人の一人だ。けれど、車椅子や、白杖など目に見えるような障害ではない。一見「普通の人」に見えるような障害。兄は優しくて、おだやかで、人の話を反論することなくじっと聞いていて、周りを人一倍見ている・・・家族の中を周りの空気をいやしてくれるような、そんな存在。たまに気持ちが落ち着かなくて怒ったり、落ち込んだりしてしまうけれど、家族には欠かせない大切な存在だ。

しかし、かなりショックな出来事があった。友達と家に帰っていて、たまたま兄を見かけると友達は言った。

「あの人がお兄ちゃんなの？前にも見たことがあるよ。なんか変だよ。」

頭が真っ白になった。私は言葉を返すことができなかった。その言葉はどんな意味を持って言っているのか、どんな気持ちで言っているのか・・・考えれば考えるほど疑問点が増えていった。産まれた時からずっと一緒に育ってきた兄のことを「変」と思ったことは一度もなかった私には、どうしてもその状況を理解することができなかった。

このようなことを母に言うかは迷った。言ったらきっと傷つくし、悲しい思いをさせると思っていたから。だけど、自分なりに考えた結果、言わないといけないと思った。家族としてどう考えたらいいのか母の考えを知らなくてはいけないと思ったからだ。正直、母に言うのはすごく勇気の必要なことだった。母は静かに話を聞いてくれた。そして、

「すごくショックだよ。」

と言った。そこから、なぜなんでそんな風に思ったのか、相手の気持ちを考えることの難しさなどについて話し、最後に、

「きっと、分からないのだよ。当事者にならないと人は相手の気持ちを理解できないものなのかもしれないよ。」

と、言っていた。

私がこれらの経験を通して考えたことは二つある。

一つ目は、障害や多様性を認められる社会を作っていくべきであるということだ。人間はみんな同じである。「あの人は〇〇だから」や「変だから」と言って決めつけるような壁を作ってはいけない。これは、障害の有無を問わず人として大切なことだと思う。壁を作った瞬間、どんな人でも差別されたような気持ちで、きっと生きにくくなってしまおうと思う。実際、芸能人も、誹謗中傷で自ら命を絶つ人がある。人を非難するのではなく、人の良いところを認めていくことができれば、お互いが気持ちよく自分の人生を楽しむことができると思う。

二つ目は、一人一人が他人を思いやった言動や行動をすることだ。気を使わないでついつい思ったことを口にする、心に深い傷ができると思う。その心にできた深い傷は、体にできたけがなどの傷と同じように消えるだろうか。私はそうは思わない。心についた傷は一生治らないと思うし、少なからずいつか思い出すときが来ってしまうと思う。だから、人とコミュニケーションをとる際は、言動の一つ一つに気を付け、相手の気持ちになって物事を考えて行く必要があると思う。

このように、私が理想とするのは、みんなが平等に生きれる、過ごしやすい社会だ。私が思い描く未来は理想が高すぎて、その通りには行かないかもしれない。だが、身近なところから、気づいたところから少しずつ意識が変わっていけば、必ずどこか変わる部分が出てくると思う。私もまず、兄の良さを堂々とみんなに語れるようになるべきだし、間違ったことはしっかり言えるようにしていきたい。みんなが生きやすい社会に、みんなが理解しあえている社会に少しでも近づいてほしい、私は強くそう願う。